

～ 自分大切さとともに他の人の大切さを認めること ～

第54回体育大会を開催しました

10月23日に第54回体育大会を開催しました。当初は、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の観点から体育大会自体の開催の可否を検討しておりましたが、大会運営等を例年と大きく変え、感染拡大防止対策を講じて開催することとしました。本来ならば、保護者や地域の方々に生徒のがんばっている姿をご覧いただき、声援を贈っていただきたいところでしたが、断腸の思いで3年生保護者のみの観覧とさせていただきました。



10月14日から体育大会の練習を開始し、結団式を行いました。赤ブロックは、1年2組・2年2組・3年2組です。そして、青ブロックは、1年1組・2年1組・3年1組です。それぞれブロックリーダーを中心にあいさつやブロック練習を行いました。

1年生にとっては中学生になって初めての体育大会となりますが、2・3年生にとってもこれまでと違う体育大会となります。戸惑うことが多く、困ったりするのではないだろうかと心配していました。しかし、生徒のみなさんはそのようなことを微塵も感じさせることなく、競技やブロック等の練習に励み、係の仕事に一生懸命にとりくんでいました。

体育大会前日の22日は、残念ながら雨が終日降りました。最後の練習、そして準備が予定通りにできませんでした。それでも、体育館での最後のブロック練習は、どちらのブロックもフィジカル・ディスタンス[*裏面参照]をとるなどの工夫をして、応援や勝どきなどの練習にとりくんでいました。

23日明け方には雨が上がり、早朝から生徒会執行部や各係の生徒・先生方で準備がなされ、体育大会が始まりました。私は本部テントから生徒のみなさんの頑張りを観覧していました。すべてをお伝えすることはできませんが、体育大会のいくつかの場面をご紹介します。

- **開会式で選手宣誓が行われました。選手宣誓は、赤ブロックと青ブロックのブロック長がブロックを代表して行いました。赤・青ブロック長の2人が一緒に考えて創った宣誓文をブロックみんなの思いを代表して、堂々と声高らかに宣誓しました。多くの方々に感動を与える、すてきな選手宣誓でした。(宣誓文を裏面に掲載しています)**
- **今回の体育大会では12の競技を行いました。選手が入場門に整列する召集、そして、用具・出発決審・監察・記録・放送の係の準備とすべて整わないと、競技を始めることはできません。1つの競技が終わり(選手が退場をして)、間もなく、次の競技が始まる(選手が入場する)。この流れが、大変スムーズに行うことができていました。**
- **スタート前やバトンパスの時に「がんばれ」「大丈夫」と選手にかけられる声援、「全力」で競技を終え力がめけた選手の背中にやさしく手をかけ「がんばったね」と声をかけるなかまの姿、退場してきた選手たちに生徒テントのなかまたちから「おつかれ」の声と気持ちのこもった拍手など、体育大会全般わたって、たくさん笑顔と声援・拍手がありました。**
- **競技している選手に向けて、生徒テントにいるなかまたちから、フィールド内にいる競技前や競技を終えた選手からの選手から、本部テントにいる係の生徒からと、グラウンドのあちらこちらから絶え間なく、声援や拍手が送られていました。**
- **単走でもリレー競技でも、ほとんどの選手が一生懸命に競技していました。本部前がゴールでしたが、ゴールに向かってくる選手の表情や息づかいが「全力」で競技していることを物語っていました。**
- **競技では、接戦もあれば、大差がつくこともあります。競り合っている時には会場が一段と滞り、盛り上がりました。そして、大差がつき、他の選手がゴールをしても、決してあきらめずに「全力」で走りぬく凛々しい選手の姿がいくつもありました。また、競技では、スタートを失敗したり、バトンパスがうまくいかなかったり、順位を落としたいようなことがあります。しかし、誰一人として、そのことを責めたり、けなしたりすることもなしに、ひたむきに声援や拍手を贈っていました。**

コロナ禍に何とかして開催した体育大会でしたが、たくさんすてきな西中の宝にふれることができる機会となり、嬉しく思います。最後に、一言。思い込めて、西中生一人一人に“ありがとう”です。

(文責 木村彰男)



第5 4 回体育大会 選手宣誓

宣 誓

はじめに、コロナ禍の中、何もできない状態で、この体育大会を開いていただき、感謝いたします。

我々赤ブロックは、「切磋琢磨 闘志を燃やし」というスローガンのもと、互いに助け合ってきた練習の成果を発揮することを誓います。

我々青ブロックは、「チーム一丸となって、体育大会を成功させる」のスローガンのもと、日々練習してきました。練習の成果を出しきり、体育大会を成功させます。

赤ブロックが勝とうとも、青ブロックが勝とうとも、全校生徒、笑顔で終われる体育大会にすることを誓います。



令和2年10月23日

赤ブロック ブロック長 牛島 遥哉
青ブロック ブロック長 馬場 楓真

「フィジカル・ディスタンス」

福岡県教育委員会から学校に届いた文書で、私は初めて知りました。私自身の情報取得および学習不足を痛感した次第で、生徒のみなさんをはじめ西中の関係者にお知らせすることが遅くなりましたことをお詫びいたします。

「ソーシャル・ディスタンス」という用語は、新型コロナウイルス感染拡大防止策として日本で使われています。しかし、この言葉は、インドを含む南アジアにおいて、長い歴史の中でカースト制度の外側におかれた特定の集団(ダリット)を差別するために使われてきた歴史があり、世界保健機関(WHO)では「身体的、物理的距離」を意味する「フィジカル・ディスタンス」に言い換えるよう推奨しています。

改めて調べてみますと、令和2年5月4日にありました「新型コロナウイルス感染症に関する安倍内閣総理大臣記者会見」において、当時、新型インフルエンザ等対策閣僚会議新型インフルエンザ等対策有識者会議新型コロナウイルス感染症対策分科会の尾身会長の発言に「…(略)先ほども、各事業者についてもまたガイドラインをつくっていただきたいということですが、では、3つの基本的な原則といいますが、基本は何かというと、これは1つ目はよく言われる、今、一番大事なのはフィジカル・ディスタンス。今、ソーシャル・ディスタンス、社会的隔離と言っていますけれども、我々は少し社会的隔離と言うと何か分断しているようなので、フィジカル・ディスタンスを取ることが極めて重要です。ワクチンがない今のこの状況で感染症対策に最も大事なのは、感染しているかもしれない人とそうでない人の、これはもうずっと古典的にそうなのです。これが一つ、フィジカル・ディスタンス。…(略)」とあります。また、厚生労働省のホームページなどでの記載でも、ソーシャル・ディスタンスではなく、フィジカル・ディスタンスの表記が用いられています。

つまり、そのようなつもりはなくても、ソーシャル・ディスタンスという用語には、「あなたとは近づきたくない」「私に近寄るな」と、他者(その個人)を忌避するという意味があると言えます。今は、新型コロナウイルス感染症の感染リスクを避けるために、互いに飛沫感染を防止するため(感染させない・感染しない)に身体的距離(約2m)をとっているわけで、決して他者(その個人)を忌避しているわけではありません。

生徒のみなさんには前期の終業式で伝え、後期の始業式で補足説明をしました。今後は「フィジカル・ディスタンス」を用いていきます。保護者の皆様におかれましても、ご理解とご協力をお願いします。

